
地獄の階段

白駒の池

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

地獄の階段

【Nコード】

N7219M

【作者名】

白駒の池

【あらすじ】

ぼくがおかあさんに突き飛ばされて石段から転がり落ちて骨折して入院した病院で、36は必死で何かに耐えながらやってくるであろう死の時を待っているようだった。

36が死んでしまうような病氣なことをぼくは薄々感じてはいたのだけど、ぼくの涙に36は大人の男になるための勇気をくれたんだ。でも、ぼくはたったひとつの男の約束を破ってしまった。

36の涙の涙を36を訪ねてきた男の人に話してしまったんだ。

ぼくは大人の男にはなれなかった。

36の涙

夏の暑い日だった。

家にいるとおかあさんに嫌われるから、ぼくは、虫取り網と虫籠をもって朝早くから長い石段のある公園に毎日出かけていたんだ。

ぼくたちの間では「階段公園」って呼んでいた。

本当の名前は「立石公園」と云うんだけど、誰もそんな名前では呼んでいなかった。

ギラギラした太陽の下。ぼくは毎日走りまわっていたのだけど、ぼくは誰かに背中を思いつきり押されて、気がついたときは階段の下まで転がり落ちたんだ。

そして、次にいたのは病院のベットの上だった。

警察の人にいるいろいろ聞かれたけど、ぼくは転がりおちてゆくその時に石段の上で、怖い顔をしたおかあさんを見たんだけど、でも、誰かに押されたことも、おかあさんを見たことも決して誰にも言わなかった。

言えなかった。ほんとうに怖かったから。

ずっと前からおかあさんが怖かった。

ぼくのおとうさんはぼくが生まれる前にぼくとおかあさんをおいてべつの女の人と出て行ったんだときいたことがある。おとうさんが欲しかったけど、おとうさんの話をする、おかあさんは、ものすごい顔をしてぼくのことを怒るから、ぼくは絶対におとうさんの話はしなかった。

おかあさんは朝早くから遅くまで働いて、毎日のように溜息ばかりついていた。

溜息をつく、幸せがそのたびに逃げてゆくんだ、と学校の先生が言っていたのだけど、おかあさんは、毎日毎日たくさん溜息をついていた。

ある日学校から帰り、アパートの部屋には、布団の上に汗をかいた
疲れたおかあさんと、知らないおじさんが寝ていた。
あわててぼくはドアを閉めてその場所から立ち去ったんだ。

そんなことがあって、ぼくはおかあさんに突き落とされたんだ。
長い石段の上から。

おかあさんはぼくが邪魔だったんだと思う。

ぼくが入院した病院でおかあさんは、

「足の骨なんか折って」

と言った。心配しているとは思えなかった。

ぼくが車いすで病院の中を動けるようになった時、ぼくの病室の前
の部屋に一人の男の人が入院してきた。

「いくつ？」

その人はドアを開けたままの一人ぼっちの病室から、ぼくをのぞき
こんでそう言った。

「8歳」

ぼくがそう言っていると、その人は、

「俺、36」

と言った。で、その日から、ぼくたちは

「よう、8歳！」

「なんだよ！36！！」

とお互いを呼び合うようになったんだ。

後から気がついたんだけど、36はいつもドアをあけたままにして、
誰かが来るのをずっと待っていたんだと思う。いつも、ドアの外を
気にしていて、物音ひとつ聞き逃さないようにしているように思っ
たんだ。

それから、何日かおきに女の人が36の部屋にやってきて帰って行った。短い時間で、話をしている風でもなく、あれが36の奥さんなんだと思ったけど、36はちつとも楽しそうじゃなかった。

36が待っているのは、奥さんじゃないんだな、と8歳のぼくにだつてわかつたさ。

ぼくのところへも36のところにも決して待つている人は来てくれなかつたんだ。

ぼくのところに学校の先生が来た日だったから4月20日だったけど、36の部屋はずっとドアが閉まっついていて、何かあったかと思つていたら、そこから怖い顔をした男の人が出てきた。あわててぼくは廊下の隅に隠れたんだけど、その時、その怖い顔をした男が言ったんだ。

「ヤツには無理ですね・・・」と。36に何が無理だったのかはぼくにはわからないけど、そのあと、36の部屋からは36が枕が何かに顔を押し付けて泣いている声が聞こえたんだ。ぼくといっしょだった。おかあさんに聞こえないようにぼくは毎晩そうやって泣いていた。だから、あれは絶対36が誰にも聞こえないように必死で枕に顔を押し付けて泣いていた声だと思う。

36はその日からしばらく部屋のドアを開けなかった。

みんなの涙

ぼくが次に36を見たとき、36は本を読んでいた。

あんなに廊下からの物音を気にしていたはずなのに、いつの間にか、廊下なんてどうでもいいという風だった。

そして、読みかけの本を膝にのせて、遠く諏訪湖が見える大きな窓を見つめていた。

ぼくの存在なんてどうでもいい、

というのが気に入らなかったけど、何がおもしろいのか、必死で本を読んでいた。

36のところには、奥さんらしき女の人と、友達だっという男がよく来ていたんだ。

けど、ぼくはその男があんまり好きじゃなかった。36はいつも、車いすでエレベーターの前まで見送って、「また、きつと」って言うて別れていたんだ。

でも、ぼくはととても36が気になっていて、とうとうその男に話しかけてしまった。

ぼくが、ようやく松葉杖で入院していたフロアをあるけるようになったあの日。

あの日、その男は男のくせに涙を流してエレベーター前の椅子に座って泣いていた。

36は必死で声を殺していたけれど、その男は、もう、廊下に響きそうな勢いで泣いていたんだ。

ぼくが、

「36は声なんてださないぜ。」

と言ったら、36の意味がわからなかったらしくて、驚いた顔をしていた。

後でわかったけど、ちょうどその時、36は検査でどこか別の階に行っていて、張り詰めていた気持ちが急に緩んだんだそうだ。

「大人のくせにだらしないな。」

そう言ったら、あわてて小さなタオルで顔を拭いていた。

ぼくが、この間、いつも開いている36の部屋のドアが閉まっていた、中から、36が枕に顔を押し付けて、声を殺すように泣いていたんだ、、、と教えたら、

そいつは絶対に誰にもその話はするな、と言った……………。

「格好悪いだろ。男が泣いていたのが誰かにばれたら…………。」
って。

「おじさん、名前は??」

「おれか。おれは堺良二。」

克己の友達さ。」

「ふゝん。俺、井上達也。」

「聞いてもいいかな。」

堺が話し始めた。

「克己は、、あ、36はよく泣いているのかい？」

「……………」

「36と俺は長い付き合いなんだけど、36は入院しているだろ。泣かれると困るから、あんまり聞けないんだよ。」

「そっか。」

前はね、ドアを開けて、誰かが来るのを待っているようだった。

でも、怖いおじさんが2人来て、そのあと、36の部屋はいつもドアがしまっているようになったんだ。」

「こわいおじさん？」

「そう。怖いおじさん。」

堺は何か気がついたみたいだったけど、ぼくはまだ、それがなんだったのか理解できるほど大人じゃなかった。

「克己とは仲良しなんだね。」

「別に仲良しじゃないさ。」

ぼくがそう言つと、克己はね、とそいつが話し始めたんだ。

「克己はね、ちょっと頑張りすぎちゃったんだ。で、足がぼきつと根元から折れたのさ。」

君は足首、克己は太もも……。いつぱい走つて転んだのかい？」

そいつはぼくの足のことを聞いたけど、まさかおかあさんに押されたなんて言えなくて、黙っていたら、

「聞いちゃまずかったのかな。ごめんよ。」

つて言った。

そしたら、ぼくは、どういうわけかたまらなくなつて涙がたくさん出たんだ。

おかあさんのことを黙っているのがこんなに辛かったのかな。

ぼくはあんまり好きじゃなかったそいつの胸の中で、ほんとうにほんとうにたくさん泣いたんだ。

どれくらいだったかな。しばらくして、36が車いすにのつて、エレベーターで帰つて来たんだ。

ぼくがあわてて涙を拭いたら、36はこう言った。

「見てないから大丈夫さ。泣けばいい。」

ぼくの涙

堺っというちよつと嫌いな奴と話をした。何がイヤだって訳じゃないんだけど、あるでしょ、なんとなくいやな奴。ぼくにとっては堺っという男はなんだか好きになれない、そんな感じだった。

でも、堺はいろいろきいてきたんだ。

「克己はなんで泣いていたんだろっ」

とか、

「ちよつと怖い2人っただれだろうっ」
って。

ぼくはそんなことどうでもよかったんだ。それよりもぼくが泣いているところを36に見られたことがなにより苦痛だった。
でも、

「泣けばいい」

そう言われて、ぼくはほつとした。あの日、立石公園の石段の上でおかあさんに背中を押されて以来、ぼくはずっと、気持ちを張って生きてきたんだ。

何があつたのか言えるかい？

36はぼくにそう言つと、36の病室の大きな窓ガラスの向こうをずっと見つめていた。ぼくが、

「あのさ、窓ガラスの向こうに何があるの？」

と聞くと、36はハツとした顔になって、

「何もないさ」

そう言つたんだ。

しばらくして、ぼくは言つたんだ。

「おかあさんに押されたんだ……」。石段の上で……。

それで足が折れたんだ。
退院したら、ぼくは殺されるかもしれない。」
って。

ぼくがぼくの周りであつたおかあさんのことを話したのは、この時
が最初で最後。36は黙って聞いてそして言つたんだ。

「黙って、一人で生きていけ。」

って。ぼくは、36の病室で一人また泣いた。堺って奴がいたらぼ
くは絶対に誰にも話さなかつたさ。でも、36には話してしまつた
んだ。

「俺も。」

36は窓ガラスの向こうに視線をやりながら、そう言つたんだ。

「俺も、黙って一人で生きているさ。」
と。

それからしばらくして、ぼくの退院が決まつた。

おかあさんが先生に呼ばれて、久しぶりに病院にやってきた日、ぼ
くはずっと朝から36の部屋に隠れていた。

看護婦さんが36の部屋をのぞいて、

「前の部屋の井上君見なかつた??」

って聞いた時、36は、「いや」とだけ答えて、「今日はあまり気
分がすぐれないので、ドアを閉めておいてください。」

と言つてくれた。実際、36はあまり調子が良さそうには思えなかつたけど、ぼくは、どうしてもおかあさんの顔を見たくなかつたんだ。36は、ぼくに向かつてこう言つた。

「しつかりしろ。お前のおかあさんじゃないか。」と。

でも、ぼくのおかあさんは、ぼくを殺そうとした。ぼくはそう思つ

ているから、どうしても、会いたくなかったんだ。
ねえ、ぼくにはこれから先の未来があるんだろうか……。

って言った時、36は言ったんだ。

あるさ。

って。

その日、急に、本当に急に退院することになったんだ。

正確に言つと、お金が払いきれなくて、病院から追い出されたんだけど、

部屋を出てゆくその時に、

ぼくが、36の部屋を覗き込んだその時に、

36の部屋は、諏訪湖の見えるその窓が大きく開かれて、カーテンが怖いくらいになびいていたよ。

一瞬、そこから飛び降りたのかと思ったほどだったよ……。

結局それっきり会うことはなかったけど、

36はずっと誰かを待っていたんだと思うんだ。

もう、確かめようがないんだけどね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7219m/>

地獄の階段

2010年11月24日13時45分発行